

令和7年度学校体育担当教員実技指導者研修会
高等学校教育研究会保健体育部会地区別研修会【県西地区】
報告書

1. 期日 令和7年11月25日（火）

2. 会場 茨城県立坂東清風高等学校 体育館、会議室

3. 種目 体つくり運動

講義題目 「多文化共生時代、体育のアップデートを考える」

4. 講師 一般社団法人 COES（コエズ）共同代表

筑波大学大学院体育科学 学位プログラム・博士後期課程 古田 映布

5. 日程 受付 9:00 ~ 9:30 (会議室)

開講式 9:30 ~ 9:50 (会議室) 会場校校長挨拶

保健体育課指導主事挨拶

県高教研保体部副部長挨拶

諸連絡

講義 10:00 ~ 12:00 会議室

昼食 12:00 ~ 13:20

実技指導 13:30 ~ 14:30 体育館

研究協議 14:30 ~ 15:00 会議室

閉講式 15:00 ~ 会議室 講評（保健体育課指導主事）

諸連絡 ※次年度開催校確認

6. 参加者 高等学校教員 36名

特別支援学校教員 1名

中学校教員 1名

7. はじめに

* 県西地区では、外国籍の生徒、外国人生徒支援が必要な生徒が増えている現状がある。

・R8年度、高等学校外国人生徒支援 重点校6校（県西地区3校）

石下紫峰高校、結城第一高校、坂東清風高校

・R8年度、高等学校外国人生徒支援 支援校4校（全て県西地区）

筑波高校、茎崎高校、結城第二高校、三和高校

8. 実施内容

【 午前：講義 】

「多文化共生時代、体育をアップデート」

海外ルーツの子どもたちが増えていくなかで、体育の授業で何ができるだろう。

- ・外国人児童生徒等の増加に伴う課題
- ・多文化共生ベーシック
- ・保健体育教師が感じる指導の難しさ
- ・授業を振り返る
- ・アクションプランを考える

○アンコンシャス・バイアス

何かを見たり、聞いたり、感じたりしたとき等に、無意識に“こうだ”と思い込むこと。

「無意識の思い込み」や「無意識の偏見」のこと。

例) 外国人、外国にルーツがあると聞いて

- 運動、スポーツが得意なのだ と思うこと
- 日本語での説明は分からぬ と思うこと

○マイクロアグレッショhn (自覚なき差別)

悪意がなくても、無意識の偏見や思い込み（アンコンシャス・バイアス）によって、相手の属性（人種、性別、性的指向、障がいなど）を傷つけたり、否定的なメッセージを伝えたりする些細な言動のこと。

例)・「女性だから丁寧だね」「男性なのに優しいね」等の発言

- ・日本で育った外見が外国にルーツがある人に対し、「日本語がお上手ですね」と言う

- ・体育や保健の授業で起こり得る マイクロアグレッショhn 等、ブレインストーミングを活用して多くの意見交換をおこなう。



【午後：実技、研究協議】

○実技指導の学習指導案

学習内容	◎外国人生徒に対応した指導
<p>◆アイスブレイク（心ほぐし）</p> <p>○ネームコーリングパス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10人1チーム ・チーム対抗 	<p><ボール6個></p> <p>◎名前を呼ぶだけで、生徒自身の所属感が生まれる。</p>
<p>◆文化的背景に対応する指導（体ほぐし）</p> <p>○多言語「頭、肩、膝、足、ボール」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ver. 英語 head, shoulder, kness, toes ・ver. ブラジリアンポルトガル語 頭 cabeça カベッサ 肩 ombro オンブロ 膝 joelho ジョエリョ／ジュエリョ 足 pé ペ ・ver. 韓国語 頭 머리 モリ 肩 어깨 オッケ 膝 무릎 ムルプ／ムルッ 足 발 パル ・ver. アラビア語 頭 رأس ラ'ス 肩 كتف カティフ／キティフ 膝 ركبة ルクバ 足 قدم カダム 	<p><ボール20個／2人1組で一個を想定></p> <p>◎日本語以外の言葉がわかる生徒がリーダーシップをとる場面をつくることができる。</p> <p>◎日頃、言語に困っていない日本語が第一言語の生徒が、日本語が第二言語の生徒の立場を考えるきっかけになる。 言葉かけ「せっかく日本語以外を話せる子もいるから、いろいろな言語で試してみよう！」</p> <p>◎わからない言語を注意深く聞きながら、運動することができるだけ難しいことかを理解することができる。</p>
<p>○じゃんけん尻尾おに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・向かい合わせに並び、じゃんけんをする ・勝った方が背中側に逃げる 	<p><しっぽ／ビブスで代用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界共通のじゃんけんを使い、シンプルなルールで、ゲームに集中することができる。
<p>◆協力ゲーム</p> <p>○力を合わせて、立ち上がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2人1組から ・3人1組「3名」 ・4人1組「Quattro」 ・5人1組「خمسة (ハムサ)」 	<p>◎日本語以外の言葉がわかる生徒がリーダーシップをとる場面をつくることができる。</p>
<p>○人間知恵の輪</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5人で練習 ・10人 	<p>◎難しい言葉は使わないが、コミュニケーションを取らなければ、成功できないため、コミュニケーションの促進になる。 ・クラスでの達成感を生み、全員がクラスの一員であること、クラスへの所属感が育むようにする。</p>



○講評（保健体育課指導主事）

< 体育授業でのユニバーサルデザイン >

・多文化共生の視点が重要

→ 言語の壁、教員の指示や説明（特に動きやルールに関する専門用語）が理解できない。

・文化、習慣の違い

→ 日本特有の体育文化（集団行動、特定の用具の使い方）に戸惑う。

→ 宗教上の理由で肌の露出を避けたい。

・学習環境への不慣れ

→ 日本の学校生活や学習規律（例：整列、着替えの時間厳守 等）に慣れていない。

< 「わかる」ための言語的配慮 >

・多言語、絵カードの活用

→ 基本的な指示やルールを、絵カードや写真、母国語で提示する。

→ 活動の流れや授業の目標を視覚的に教室に提示する。

・指示の明確化と視覚化

→ 指示は、一度に一つ、短い言葉で、ゆっくりと伝える。

→ デモンストレーションや動画を併用。「耳」だけでなく「目」で理解する。

< 「できる」ための文化的、環境的配慮（活動の工夫）>

・用具や服装の配慮

→ 宗教的な配慮が必要な場合、長袖の着用や ヒジャブ の許可など、柔軟に対応。

→ 運動能力や経験に合わせた多様な用具（軽量ボール、低いネット、広いコート）。

・ルールの柔軟な変更

→ ジェスチャー や アイコンタクト で協力できるルールを取り入れる。 等

○研究協議 、 1日を振り返り意見交換をおこなう

< 参加者アンケート結果（抜粋） >

・外国人生徒への配慮、考え方、教材などを教えていただき学びになった。

・外国人の授業に対するアプローチのヒントを得ることが出来ました

・アンコンシャス・バイアス、マイクロアグレッションは、かなり勉強になりました。

・良かれと思ってやっていたことが、相手にとって「嫌なことだったのかもしれない」というところで気をつけていきたい。

・実技研修はわかりやすく、取り入れていきたいと思いました。

・文化的背景を意識していきたいと思いました。

・多言語で実際に活動してみると、理解が難しい瞬間があった。実際に生徒でも同じような思いを持っていたのでは？と思いました。 体験してみることが生徒理解にもつながると実感しました。

・外国籍の生徒に限らず、多様な生徒に配慮することは当然であるが、特に言葉が理解できない生徒に対しての対応が参考になった。

・多文化共生を意識した体育授業では、言語差だけでなく文化的な価値観の違いにも配慮した指導が求められることを学んだ。 等